

死顔

映画文学人生論

吉村昭 (1927-2006)

『死顔』 (2006) 「新潮社」

『炎天』 (1987) 「石の会」

『海も暮れきる』 (1980) 「講談社」

津村節子『紅梅』 (2011) 「文藝春秋社」

泰然の死は、医学者故に許される一種の自殺といえるが、賢明な自然死である

吉村昭は満七十九歳で尊厳死を選んだ。点滴の管を抜き、カテーテルポートの針も抜いて最期を迎えたという。その報道を聞いて、それは自然死ではなく、自殺ではないかという気がしたが、末期ガンで、もうたすからなことがわかっていて、場合、それ以上の延命治療を望まないという患者の気持はよくわかる。

吉村昭は学習院で俳文学を専攻した。放浪の俳人尾崎放哉を主人公とした『海も暮れきる』や句集『炎天』も遺しているが、一般には、『戦艦武蔵』『関東大震災』『三陸海岸大津波』などノンフィクションの記録文学で知られている。

その作風は史実と証言に基づく事実のみを描くリアリズムで、事実を事実を語らせるといふ方法だ。それでは面白いドラマにならず、ものたりないと思う読者もいるかもしれないが、吉村昭は、史実そのものがドラマと考えていて、そこにフィクションをまじえることはしない。

二十一歳のとき喀血し、胸部成形手術で左胸部の肋骨五本を切除した。それはきわめて危険な手術で、一年以上生存率は三〇パーセント強と言われていたが、幸いにも、徐々に症状が消えた。

死後に刊行されたものだけでも十数冊ある吉村昭のぼう大な作品集を眺めると、人間は二十歳で死ぬのと七十九歳で死ぬのではずいぶん



吉村昭さん



津村節子さん

死顔

映画文学人生論

違うものだという感慨にさそわれる。

『死顔』も死後に発表された作品のひとつだ。もちろん本人が自分の死顔について描いたものではないが、その死生観は幕末の蘭方医佐藤泰然についての次の文章からうかがうことができる。

「泰然は、自ら死期が近いことを知って高額な医薬品の服用を拒み、食物を断って死を迎えた。いたずらに命ながらえて周囲の者ひいては社会に負担をかけぬように配慮したのだ。その死を理想と思いはするが、医学の門外漢である私は、死が近づいているか否か判断のしようがなく、それは不可能である。泰然の死は、医学者故に許される一種の自殺と言えるが、賢明な自然死であることに変わりない」。

吉村昭が理想的な死の迎えかたを佐藤泰然のそれであると考えていたことがこれでわかる。医学の門外漢には死期の判断が難しいが、末期ガン患者にはそれがわかったので、点滴の管を抜き、カテーテルポートの針も抜いた。それは一種の自殺ではあるが、賢明な自然死であり、医学者ではないにしても文学者故に許されると思う。

おしどり作家夫婦の伴侶、津村節子によれば、亡くなる年の日記の冒頭に、最後の日記になるかもしれないと書いている。息を引き取ったのは二〇〇六年七月三十一日の未明、二時三十八分。

夕焼けの空に釣られし子鯊かな

吉村昭